

「全徳報」子弟書紹介

『長田夏樹論述集（上）』第17章

（原載：『神戸外大論叢』第18巻第3号，1966年8月）

「坂本先生！」の呼びかけからはじまるこの論文で、著者は坂本一郎氏の退任に際し、本来は呉語に関する論考を書くつもりであったが、時間の制約でそれが果たせなかったことを明かしている。ただ、我々は本論文により著者が北方の民間芸能である子弟書に深い造詣を有していたことを知り得る。

子弟書は清代到北京を中心に行われた語り物の一つで、太鼓と三弦を主伴奏とする「鼓詞」の系統に属し、いわゆる満洲八旗の子弟により創始されたためにこの名がある。現存する子弟書の作品は膨大な数に上り、傅惜華『子弟書総目』（上海文藝聯合出版社，1954）に著録される総数は400種を超える。各作品の基本形式は、他の説唱芸能と同様七言句を主体とし（ただし若干の襯字を交える）、二句ごとに最終字が押韻される。押韻の体系是北京音系の俗曲十三韻に基づき、一回は一韻到底である。

本論文が扱うのは韓小窗（1840?-1896?）の作とされる子弟書『全徳報』であり、著者は第1節でその正式名称、第2節で作者について論じた後、第3節では全体の梗概を紹介し、第4節では基づく故事について考証し、第5節は全8回のうち3回（第4回「贅婿」、第5回「洞房」、第6回「訓女」）分の全文紹介とそれに対する注釈に当てられている。

この子弟書『全徳報』については、波多野太郎編『子弟書集第一輯附提要校記』（横浜市立大学紀要・人文科学第6編中国文学第6号，1975）に著者所蔵の光緒20年（1894）財勝堂刊本、波多野氏所蔵の学古堂排印本及び錦章図書館石印本が影印されているほか（台湾中央研究院歴史語言研究所蔵鈔本との校記もあり）、同じ作品を扱ったものとして、泰山堂刊本『千金全徳』の排印が関徳棟・周中明編『子弟書叢鈔』（上海古籍出版社，1984）に、また清蒙古車王府旧蔵鈔本『千金全徳』の排印が劉烈茂・郭精鋭主編『清車王府鈔蔵曲本・子弟書集』（江蘇古籍出版社，1993）、北京市民族古籍整理出版規劃小組輯校『清蒙古車王府蔵子弟書』（国際文化出版公司，1994）等に収められている。

なお、波多野氏の『子弟書集』には「長田教授夏樹架蔵」として『弔綿山』、『憶真妃』、『糜氏托孤』、『蝴蝶夢』、『黛玉悲愁』、『露淚縁』、『疑媒』、『浪子歎』、『大煙歎』の刊本が影印されており、著者の子弟書コレクションの一端を知らしめている。（竹越孝）